天花

TENGE

山口県立美術館ニュース

第19号

昭和59年3月31日
発行山口県立美術館

最上寿之　カミガミトモガミ

表紙作品解説

最上寿之

1936(昭和11)～

カミガミトモガミ

木　1979

最上寿之は、一年周期で躁病期（感じる時期・吸収する時期）と鬱病期（閉じこもる時期・仕事が始まる時期）を繰り返しているのだという。この周期は、さらに一〇年周期の大きな波となるのである。一九七九年は、二度目の大周期の最後の時期にあたっている。「カミガミトモガミ」は、この年に制作された記念すべき作品なのである。

一九六〇年代の最上の木彫群は、「ダンダンダ」（一九六一年）や「トンカラリン」（一九六九年）のような明確な一つの方向性をもった作品群と、「ハッハッハッハ」（一九六三年）や「ニョキニョキ」（一九六四年）のような平面性をもった作品群とに大きく分けられる。しかし、これらの作品群は、作者によれば、いずれも「柾目に感じて」制作された作品群なのである。

一九七〇年代の前半、躁病の大周期にいたるまで制作され続ける、「トテチテター」（一九七一年）のような同形あるいは類似形の部材を重ねた、いわゆる「遊びの作品」群を経て、一九七〇年代の後半、鬱病の大周期へと入っていく。

この時期、最上の関心は柾目から木口へと移っていく。木口は、最上によれば「目に見えない部分」である。

その目に見えない部分は、接合面となり、材の向きを変えることによって、自らの存在を主張する。そして、作品そのものの影の支配者となるのである。「カミガミトモガミ」に見られる折れ曲がりやねじれ、空間の中で危うく保たれているバランスも、木口の接合面によって形作られている。材の側面、目に見える部分は、木口のツマなのである。

この作品に見られる危うく保たれたバランスも、最上が追い求めている無重力の表現である。折れ曲がった角材は、ユラユラと空間に漂い出る。これによって、この作品は、一つの方向性あるいは平面性、累層性といったこれまでのやりかたとは異なった方法で、三次元の広がりを獲得したように思われる。

一九八一年の個展に出品された「ボクノムコウニボクガイル」などの作品を見た現在の目からは、「カミガミトモガミ」に見られる折れ曲がり・ねじれは、最上が新たなやりかたで空間を獲得するための身もだえのように見える。（米屋優学芸員）

ボクノムコウニボクガイル

ハッハッハッハ

ダンダンダ

展覧会案内

プラハ国立美術館秘蔵名画展・Ⅲ

プラハ国立美術館のコレクションはすでに過去二回（一九八〇、一九八二年）わが国に紹介されており、第一回展では、中世末期のゴシック美術からバロックを経て一八世紀までのいわば古典絵画の伝統が展示され、第二回展では、その続篇として一九世紀以後の近代絵画の発生とその展開がテーマとされ、それぞれ関係の深い他のヨーロッパ絵画の流れが対比されていた。そうした構成によってチェコスロバキア絵画の特色が明らかにされたわけだが、一方でそれは、かの国の歴史の微妙で複雑なありようを考えさせるものである。

チェコも含めて、東ヨーロッパ諸国の多くは国としての統一性をもったのが比較的新しく、長い歴史をもちながらも周辺の大国の支配を受ける受難期が続いたといわれる。チェコは、西方ボヘミアをハプスブルグ家（ドイツ・オーストリア）に、そして東方スロバキアをハンガリー帝国にそれぞれ数百年も支配されており、国家統一の実現（第一次大戦後）はすなわち近代国家の成立であった。中部ヨーロッパで初めて設置されたカレル大学（一四世紀中頃）も、ルクセンブルグ出身のカール四世の業績であり、マニエリスムの特異な美術の展開をみせた一五〇〇年代末のプラハの活況も、ハプスブルグ家のルドルフ二世の手腕によるものであった。しかし、そのような外来文化が民族的なそれと対立関係にあったかというと必ずしもそうではなかったらしく、政治的な愛国主義と文化的レベルのさまざまな問題、つまり宗教、言語（文学）、音楽などの歴史的展開とは、単純な関係で結びつけられないというのが正直なところらしい。

たとえば美術の例をとってみると、チェコのバロック期の代表作家とされるペトル・ブランドル（一六六八～一七三五）の作品は（第一回展に出品）、新・旧教両派の最後で最大の抗争であった三十年戦争後、再び旧教的な宗教的バックボーンのもとで展開したバロック美術のいわば反宗教改革的文脈での一成果とも考えられているが、明暗のコントラストの強い表現にその精神性がくみとれるとしても彼は、西ヨーロッパ諸国ですでに成熟しつつあったバロックのより自由な表現性を充分にふまえた作家であり、形式的な外来様式の受け売りでもなければ単なる排外主義者的でもなく、きわめて高度な内容をもつ作家であることは明らかである。このことはいってみれば、古くから中部ヨーロッパの交易の要所として発達してきたプラハ自身が、民族的なローカルな意識と国際性とをあわせもっていたということを示すものともいえ、ボヘミアでのドイツ・オーストリアの影響力が強いのは当然のこととはいえ、それにのみこまれずにフランスやイタリアの動向にも敏感でありえたことにも、被支配民族のバランス感覚のようなものが感じられるとさえいいうるが、それはともかくとして、周辺と隔絶した特殊な形式としてではなく彼の国の美術史があることを、われわれは再認識するのである。

さて、今回の内容は第二回展を補いながら印象派以降の動向に重点がおかれていて、次の四コーナーに分類されている。

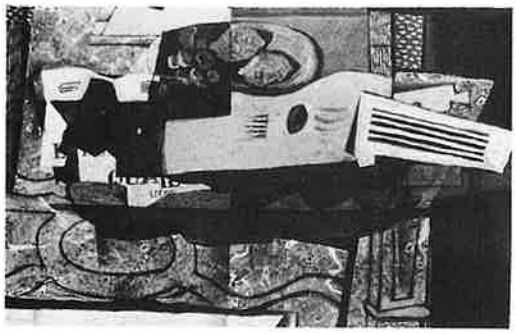
㈠ フランス絵画

近代的な動向の中心フランスから印象主義の作家（モネ、ピサロ、シスレー）とそれに続くシニャック、セザンヌ、野獣派のヴラマンク、ドラン、マルケ、ヴァン・ドンゲン、立体派のピカソ、ブラック、ロート、超現実主義のタンギーなど。

㈡ ヨーロッパ絵画

ドイツ印象派のリーバーマン、象徴主義のモーダーゾーンや、表現主義傾向の作家、なかでもプラハに関わりのあるココシュカと初期のエルンストが興味深く、イタリアの未来派セヴェリーニ、形而上絵画のキリコ、ロシアのファルク、レンツーロフなど。

カミーユ・ピサロ　野菜畑　一八八一



ジョルジュ・ブラック　ギターのある静物　一九二一

パブロ・ピカソ　裸婦　一九〇八

マックス・エルンスト　家庭生活　一九一三～一四

㈢　チェコスロバキア絵画

スラヴィーチェク、フデチェク、プライズレルらの印象主義・象徴主義的傾向や、抽象のクプカ、プライシング、立体派のクビシュタ、詩的な絵画のズルザヴィー、超現実主義のトワイヤン、シュティルスキーなど。

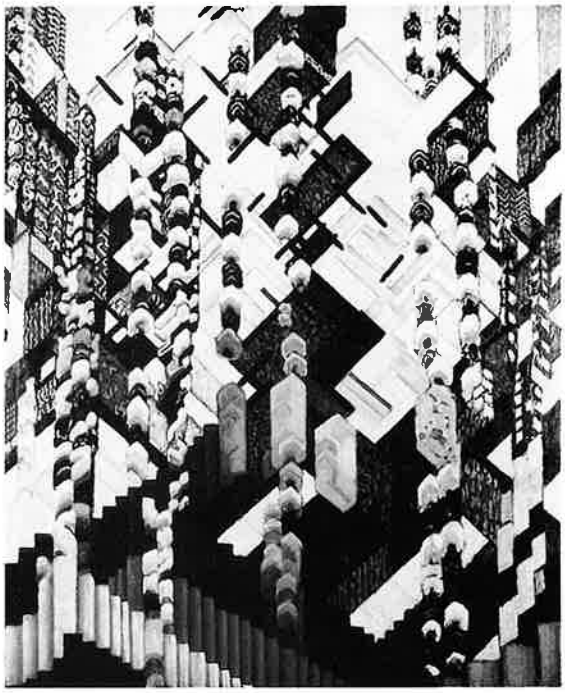
㈣　素描

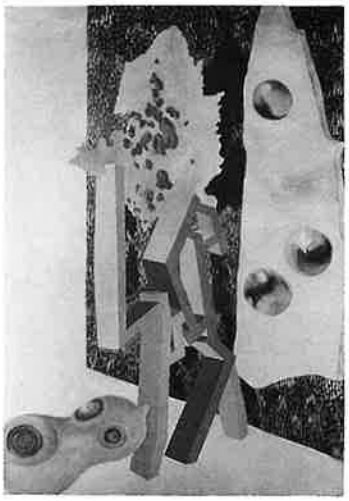
㈠～㈢に属する作家の他にシャガール、クリムト、シーレ、シュヴィッタースなど。

フランスの絵画傾向が手厚いのは近代美術の特徴として当然とはいえ、地の利もないプラハの美術館がこうした作品をそろえたのは比較的新しいことがカタログから知られる。その入手経路には何通りかあるようだが、前述のこととも関連して、自国の近代美術を語るのに必要な作品を可能なかぎり収集していくというような客観的な姿勢がうかがわれて興味深く、歴史的な関わりから、ドイツ・オーストリア系の作家がフランス系の作家に対置されるにふさわしい内容をもっているというのも特徴的であろう。

ところで、油彩画全般で最も力点のおかれているのはオーストリア出身でプラハに滞在したこともあるオスカー・ココシュカ（一八八六～一九八〇）と、ボヘミア出身でパリで活躍したフランチシェク・クプカ（一八七一～一九五七）の二人である。ココシュカの父はプラハ出身で、自身はナチスの手を逃れてプラハに滞在したときに結婚するなど、チェコとは縁深い。彼の表現は、ドレスデンで教鞭をとっていた第一次大戦後あたりからいわゆる表現主義的な類型を脱し、ゴッホ的ともいうべきたたみかけるような描線を主体として現実の風景（人物）を詩的に刻みこんでいくようになるが、「プラハのカレル橋とフラドチャニ城」（一九三五頃）では、描線が作り出す動きのある空間に微妙な色彩がきらめくように踊り、現実を目前にしながら心の中に変化しつつ定着する風景が提示されている。

一方クプカは、チェコ出身でパリに活躍した作家である。初期の象徴主義的なヴィジョンからのちには純粋に幾何学的な抽象へと大きくそのスタイルを変えていったクプカは、しかし第一次世界大戦前後期の活動――すなわち、ピカソなどの立体派から離れて新たな抽象へと向った活動において評価されており、そこで





(右上)オスカー・ココシュカ　プラハのカレル橋とフラドチャニ城　C一九三五
(右中)インドジフ・プルーハ　ジェレズネー・ホリの春　一九一一
(右下)ボフミル・クビシュタ　フラニークの石切場　一九一〇～一一
(左上)フランチシェク・クプカ　色面、冬の思い出　一九一三～一三
(左下)インドジフ・シュテルスキー　アカシア　一九三一

は建築的な構造性と音楽的な抒情性が特徴といえるだろう。クプカはほとんど帰国することなくパリ郊外で没したが、母国の留学生の世話をするなどその影響力も大きく、チェコ近・現代美術における最も重要な作家の一人となっているのである。

蛇足ながら、マックス・エルンストの初期の作品とされる小品「家族旅行」、「家庭生活」、それからエゴン・シーレの素描「座る女」、チェコの作家ボフミル・クビシュタの「フラニークの石切場」などが興味の深い作品である。

（高田美規雄専門学芸員）

会期　五九年五月四日(金)～六月三日(日)
（休館日・月曜日）

観覧料
○一　般　八〇〇円
○高・大生　六〇〇円
○小・中生　四〇〇円
前売・二〇名以上の団体は　各二〇〇円引

―常設展示の試み―

郷土の陶芸シリーズ

榎本　徹

当館常設展示室の一室である郷土工芸室は、館の作品収集方針に準じて、萩焼と赤間硯を主な展示対象としてきた。

工芸に関する収集方針は、すでに終了した第一次収集計画においては、現代の萩焼と赤間硯に重点をおいたものであったが、第二次収集計画では、それをふまえながら、萩焼では、江戸時代までもその対象とし、さらに、当館の企画展である「現代の陶芸」シリーズをうけて、現代の前衛的陶芸もその対象とするなど、わくの拡大をはかってきた。

常設展示も、この方針にそって展示をじょじょに変化させているが、さらに、収集方針にはないシリーズを設定した。その一つが「郷土の陶芸シリーズ」である。

このシリーズは、昭和五八年度に第1回として「豊北町の陶磁器Ⅰ――原焼」を、そして、今年度は「岩国の陶磁器」を行った。

江戸時代後期には、一般庶民にも陶磁器の使用が普及し、各地に、その土地の需要にこたえるための窯が数多く操業を開始し、独自の陶磁器を生産した。しかし、それらの大半は、明治に入って、有田や瀬戸で陶磁器の大量生産体制がととのい、高品質で安価な製品が生産され、さらにそれが輸送体制などをふくめた経済的な取引形態の確立とともに、地方にも供給されるようになった時点で廃業のやむなきにいたった。そのようななかでかろうじて生き残った窯が、戦後のブームの恩恵をうけて、クローズアップされたのであり、山口県においては、萩焼であったのである。しかし、江戸時代後期から明治期にかけての地方工芸は、工芸史的にも注目すべき存在であり、陶芸においても、見るべきものがある。

豊北町の陶磁器Ⅰ――原焼

豊北町は、陶磁器の原土・原石にめぐまれ、萩焼御用窯に原土を供給したとの記録もある。ここで陶磁器が焼かれはじめたのは、一八世紀の後半以後と思われ、一九世紀に入ると磁器が本格的に生産されはじめる。技術的には有田系であるが、陶工は有田ばかりでなく、須恵や砥部などからも流入していることが確認されている。

原窯は、安政元（一八五四）年創業と伝えられ、初めは陶器を焼いていたが、ほどなく磁器生産に切りかわった。最盛期には職人数も五〇～六〇人を数え、その住居だけで一部落を形づくるほどであり、この地方の窯でも最大規模になった。製品は染付を主体とする日常雑器で、器種は多種にのぼっている。のちにいわゆる錦手が生産されはじめているが、これはおおむね上物で、絵付けもていねいなものが多い。染付にも、大形のものには見るべきものがある。興味ぶかいのは、製品の輸送・保管にわらで編んだ叺（かます）を用いていることで、農村における磁器生産という状況を端的に示している。

岩国の陶磁器

吉川家が治めた岩国藩は、初めは本藩の萩から陶磁器を調達していたようだが、元禄一三（一七〇〇）年には、藩窯として、多田窯を開窯している。開窯にあたって、京都の陶工丹波屋安兵衛を招いて技術の指導を受けている。生産に従事したのは藩の下級武士層で、茶道方の助言を得て、製品をつくった。製品のほとんどは、藩の遣い物であったらしく、量的にもあまり焼かれてはいず、遺品もきわめて少ない。作風は、その指導のためか、いわゆる京焼風で、作意もあまり見せない素直なつくりとなっている。

一八世紀中期がこの窯の最盛期だったようで、寛政七（一七九五）年の焼成を最後に窯が使用不可能になった。このの文化二（一八〇五）年に窯を再興しているが、窯がうまくやけず、四年後には廃窯となった。

皿山窯は、寛政七年に開窯され、肥前系の磁器を焼いている。経営は民間であるが、性格的には半御用窯的なものだったようで、多田窯の土と釉薬をつかって皿山で焼かれたと伝えられるものが残っているが、あがりはかなりちがっている。主製品

原焼色絵龍文蓋付鉢

原焼染付花卉文蓋付鉢
箱に入れられている

多田焼茶碗

吉向焼鳳凰文風炉

は染付である。この窯も、十数年で廃窯になっている。

多田廃窯を受けて、藩窯再興のために、藩は、天保五（一八三四）年に大坂十三の陶工吉向治兵衛を招いて開窯したのが吉向窯である。吉向は低火度釉の陶器を得意とし、技巧の勝った作陶を見せ、天保七年まで滞在して帰国した。しかし、同年、再び岩国を訪れ開窯し、天保九年まで滞在する。この間の作陶は藩窯としてではなく、民窯であったため前者と区別して、使用した銘から岩国山焼と呼んでいる。この後、藩窯はつくられていない。

元治元（一八六四）年に開窯した錦屏山窯は、染付磁器が主産品で専門の絵師によると思われるすぐれた製品があるが、また多田焼の再興をもくろんでおり扇面形の中に「岩国多田」とある銘をほどこした多田焼風の製品もある。

岩国にはこの他にも、まだ未確認の窯があるようで、今後の調査が必要であろう。

おわりに

この「郷土の陶芸」シリーズは、今後も毎年一回のペースで行っていく予定である。過去、山口県では、萩焼だけではなく、豊かで個性ある陶磁器がつくられていた。それがなぜほろんでいったのかも興味深いことだが、江戸後期から明治にかけての状況と現代の陶磁器ブームのありようの、あまりによく似ていることもまた興味深いし、あるいは分析する必要があることでもあろう。

また別の視点からは、美術館にとってさらには館員にとって常設展示とはどのようなものかを考える機会としてみたいとも思っている。少ない館蔵品をかかえて、展示のマンネリ化に苦しむ者にとって、活路の一つとして、外部との積極的な接触をはかることも必要なことなのではあるまいか。原焼は元の窯元に、そして岩国の陶磁器は、岩国徴古館の全面的協力を得た。出品に協力いただくことは、またこちらをよく知っていただく機会にもなる。その場かぎりではないつながりを館の外に可能なかぎり数多く持つことによって、たとえば作品収集などへの情報量の増加へとつながればなどとも思う。大きな企画展ではなく、二〇～三〇点ほどの展示でもつみかさねによって新しい展開が期待できるのではないだろうか。

（当館学芸課主任）

シリーズ

山口美術家伝

(12)

―巌島虹石（いわじまこうせき）―

1869（明治２）～1903（明治36）

菊屋吉生

京都の宮脇売扇庵には、明治三〇年代に活躍した画家の扇面画が数多く残っているが、そのうちの四八面が当時の京都在住画家の作である。これらの扇面画はこのころの京都画壇の状況を概観する上で大変興味深いが、その中で富岡鉄斎、田能村直入、望月玉泉、原在泉といった大家に交じって、かなり若手の画家が腕をふるっている。そこでは、各門下の有望な若手が選ばれ揮毫を委嘱されたのであろうが、現在ではすっかり忘れさられてしまった画家の名も多い。とくに明治二七年に亡くなった森寛斎の門下からの参加は、森雄山・山元春挙・奥谷秋石・巌島虹石の四人を数えている。ここで述べる巌島虹石は、「柳に燕」の扇面を描いているが、この虹石も、明治三〇年代には京都画壇における有望な中堅としての足がかりを築きながらも、早逝したために現在では名まえすら忘れさられた画家のひとりであろう。

虹石は明治二年（一八六九）一月二六日、山口県熊毛郡嶋田村（現在の山口県光市島田）に父巌島良平、母まさの長男として生まれた。幼い頃より絵が好きで、近所でもその評判は高かったという。

明治一六年、山口中学に入学するが、画家への夢断ちがたく、同一八年に中学を中退し、洋画を学ぶべく家人に無断で上京するが、けっきょく学費に窮して帰郷のやむなきにいたった。故郷へもどった虹石は、生家に近い立野（たての）（現在の光市）に住む南画家難波覃庵（なんばたんあん）（本名伝兵衛）について学ぶようになる。覃庵は萩藩老臣で立野の邑主であった清水家の家臣であるが、維新の際は国事に奔走し、明治以降は立野にひきこもり文墨三昧の生活を送っていた。しかし覃庵も明治二一年に亡くなり、実質虹石の覃庵への師事は二年ほどで終わり、その後しばらく再び独学を強いられることとなる。

本格的な絵画修業がはじまるのは明治二四年六月に京都の大家森寛斎に入門してからである。現在山口県立美術館所蔵の「森寛斎資料」のなかに弟子の入門の状況をしるした「門人姓名録」があるが、虹石については「明治二四年六月一二日より入塾山口県周防国熊毛郡島田村小倉甚平紹介　巌島茂雄」と記してある。

同じ「寛斎資料」の中の日記にも、寛斎が幕末から明治初期にかけて京都と山口の間を往来する途次、光に立ち寄った際は小倉甚平や難波伝兵衛（覃庵）としばしば会っていたことが記されており、かなりこの二人とは交友があったことがうかがわれ、そうした関係により虹石が寛斎門下となることができたのではないだろうか。

虹石は二二歳で寛斎に入門したわけであるが、寛斎はこの時すでに七八歳であった。明治一九年に一五歳で寛斎門に入った山元春挙などにくらべると、けっして早い入門とはいえない。

しかしその後、虹石がかなり短い期間にその画技を伸ばしたことは、各種の展覧会への入賞が物語っている。その最初の展覧会入賞は入門二年目にあたる明治二六年の日本青年絵画協会展で、「小児愛狗図」を出品して三等褒状を受けている。日本青年絵画協会は同二四年に岡倉天心を中心として結成されたもので、同二九年には日本絵画協会へと発展し

巌島虹石　山水図屏風　六曲一双　山口県立美術館蔵

たものである。その日本絵画協会主催の第一回絵画共進会第三部にも虹石は「秋園閑狗図」を出品し、褒状一等を受けている。その間、明治二七年に師森寛斎が八一歳で亡くなっている。実質三年ほどの師事ではあったが、その影響はかなり大きなものであったことが、そのころの虹石の作品をからうかがうことができる。

明治二七年の款記を持つ「夏景・冬景山水図」（個人蔵）などの瀑布や松樹の表現あるいは石皴のうち方などには、寛斎から受け継いだ伝統的な円山派の描法をみいだすことができる。そこにはすでに虹石が到達していた並々ならぬ画技の高さを感じると同時に、すでに七〇名を数えていた寛斎の門下生（「門人姓名録」）のうちで、春挙などとともに虹石が特に寛斎より厚い信頼をかち得ていたということも充分に納得できる。

明治三〇年以降の虹石の活躍ぶりにはめざましいものがある。同三〇年の日本絵画協会第二回絵画共進会に「田家養蚕図」「仙山松鶴図」を出品して褒状三等、同三一年の京都美術協会新古美術品展覧会に「和波待ノ図」を出品して一等褒状、そしてこんどは同三二年、旧派系の日本美術協会展に「暮雪図」を出品して褒状三等、その翌年の同展に「西園雅集図」を出品して褒状一等を受けている。

このような実績があったからこそ、寛斎の嗣子森雄山、高弟の山元春挙、奥谷秋石らとともに明治三五年の宮脇家の扇面画制作にも加わることができたのであろう。このころには虹石は、すでに独立して、室町御池下ルに居を構え、画塾を開いていた。そして亡くなる明治三六年ころまでには、その弟子は山本天昌や原田西湖をはじめとして二〇名ほどにもなっていたという。

明治三〇年代の京都画壇は世代交替の時期と同時に、総体的に画風の大きな転換期にもあたっていた。画壇の中心的存在になりつつあった竹内栖鳳は明治三三年にパリ万国博覧会の見学を理由に渡欧し、帰朝後西洋画の影響が強く感じられる一連のセピア調の作品を残している。また同門の山元春挙も油彩画や写真術を積極的に学び、明治三四年には農商務省の命により渡米し、その後「ロッキー山の雪」や「北米コロラド残雪」といったまさに写真術をそのまま生かした作品を描いている。

こうした当時の京都の中堅画家たちにみられる欧米絵画からの直接的な影響を、やはり虹石もそうとう強く受けていたようである。年記こそないが、落款の書体などから晩年の作品と思われる「山水図屏風」（山口県立美術館蔵）などにはそうした新しい感覚がすでにあらわれはじめている。松樹や土坡の表現にはまだ円山派の影響が色濃いが、縦に面割したような皴を持つ山岳表現は虹石独持のものであり、この時期の他の山水図にも多く描かれている。金泥を刷毛で引き、その余白によって雲煙をあらわし壮大感を滞わせる画面の中には、速筆ながらも写実性を強く感じさせる茅屋や小舟が描かれ、すでに虹石が持ちえていた近代性をみいだすことができる。そこには同門、同世代の山元春挙同様、比較的保守性の強い師寛斎の画風から完全に一歩踏み出した虹石の新鮮な感覚があふれている。

京都における中堅作家としての地歩を確実な足どりで築きつつあった虹石は、明治三六年一月、新年宴席で不慮の事故に遇い、病の床へ伏すこととなる。同年七月には療養のため郷里島田へ帰るが、病状はさらに悪化し、同年一二月一五日、ついに三四歳の若さで亡くなった。渡欧の希望も実現しかけ、画家としての順風満帆の生活にふりかかった突然の災厄であり、同門の春挙がしだいに京都画壇の中心的存在となっていったのとは、あまりにも対照的な結末であった。

（当館学芸員）

美術館この一年
1983.4－1984.3

松林桂月展

自主企画展

山口の現代美術Ⅱ

4月16日―5月8日・図録スキラ版44ページ（残部あり）

県ゆかりの若手作家の近作を紹介する企画展で、昭和55年度を第1回として、隔年で開かれている。今回は第2回にあたる。出品作家はつぎのとおり。

嶋田日出夫（平面・山口市）武市勝（リトグラフ・山口市）西岡文彦（合羽摺り・川崎市）原田文明（インスタレーション・岩国市）堀研（油彩・宇部市）前川謙一（油彩・横浜市）矢儀浩嗣（油彩・田布施町）山下哲郎（油彩・福岡市）吉松順一郎（木版・コログラフ・宇部市）

松林桂月―その墨と色彩の妙―

10月22―11月27日・図録A4版・168ページ（残部なし）

没後20年にあたる回顧展。初期から晩年までの代表的作品53点を展示し、桂月芸術の全体像を浮き彫りにするとともに、渡辺崋山ら4人の系譜関連作家による13点をあわせて紹介し、近世から近代にいたる南画の画系継承過程のなかでの桂月の位置づけを試みた。ほかに参考資料として、画稿類をはじめ絵付皿などもあわせて展示された。

近・現代日本の彫刻

昭和59年1月6日―2月12日・図録A4版・128ページ（残部あり）

明治初期における洋風彫刻の移植期から戦後を経て同時代までの日本近・現代彫刻の流れを、木と金属（ブロンズをふくむ）という単一素材による53点の作品によって概観し、わが国の立体造形における特質を考えてみようとした。Ⅰ明治から戦前までの彫刻・Ⅱ戦後の彫刻①抽象のはじまり。具象の変容、Ⅲ同②彫刻から立体造形へと3会場にわけ、出品作家は44名。

共催展

浮世絵の美―錦絵の系譜・春信から清親まで

5月14―6月19日

江戸時代に開花した町人文化の華、浮世絵は近世美術を代表するばかりでなく、印象派以降の西洋絵画にも大きな影響をあたえた。本展は、とくに「錦絵」に焦点をしぼり、その歴史と推移を概観するとともに錦絵以前の初期浮世絵もあわせて紹介した。鈴木春信、鳥居清長から小林清親、井上安治まで35名の絵師による170余点の作品が展示された。

フランス近世名画展

8月9日―9月11日

ルーアンをはじめフランスの地方美術館5館とルーブル美術館の各所蔵品から選ばれた代表的作品の紹介をとおして、バロック期から前印象派の時代まで300年間のフランス絵画史の推移をたどろうとする企画で、とくにデッサンの紹介に重点がおかれたのが特長。ニコラ・プサンからミレー、コローまで油彩64点、デッサン49点が紹介された。

常設展

常設展示は、年ごとに充実されつつある館蔵品の紹介を中心に、郷土工芸、香月泰男、小林和作の各室、および第2常設展示室を利用し、それぞれ年数回テーマを設定して親しみやすい内容の展示をおこなっている。

県美展

移動美術館

県美展

第37回山口県美術展覧会

9月27日―10月12日

県美展は、昭和54年におこなわれた県美展改革の意図がしだいに理解され、県民の美術文化振興のうえに欠かせない事業として定着しつつある。今回も第一線で活躍する美術批評家や作家を県外から審査員として招待し、審査の公平を期すとともに、厳選主義を通すことによって質の向上をはかった。

出品838点　入選143点　入賞41点

移動美術館

11月2日―6日／11月9日―13日

移動美術館は、開かれた美術館事業として好評のうちに回を重ねてきたが、昭和58年度は県下つぎの二か所で「現代の美術」と題して館蔵品から14作家27点の作品が展示紹介された。

阿武町中央公民館　入場者　2045名

玖珂町町民センター　入場者　2143名

美術講演・講座、実技講座

美術に関する講演・講座および実技講座は、県民の参加する開かれた美術館活動に欠かせないものとして意義をふかめつつある。今年度はつぎのとおり実施された。

美術講演会（10／30）

「松林桂月―師をかたる」

日本画家　西野新川

美術講座（8／21・10／2・10／9・昭和59年1／15）

「フランスの絵画」

山口芸短大助教授　福田東亜

「県美展の出品作品について」

洋画家　服部碩夫

書　家　田中江舟

写真家　三堀英夫

「わたしと彫刻」

陶彫家　三輪龍作

夏期美術講座（当館学芸員6名による短期集中講座で、今回がはじめての試み。8／18・8／19・8／20）

山口の近代洋画（足立明男）／萩やきのはなし（榎本徹）／中本達也（高田美規雄）／香月泰男のシベリア・シリーズ（安井雄一郎）／雲谷等顔とその時代（山本英男）／松林桂月（菊屋吉生）

土曜ビデオ講座（7／9・7／16・7／23・7／30）「今日のアメリカビデオ」

実技講座

洋　画　冨永恒光

版　画　殿敷　侃

日本画　中村　脩

貸館による展覧会

美術文化協会展　6月22日―26日

日本現代工芸展　6月30日―7月17日

日本国際美術家協会展　7月21日―29日

全国高校文化祭　8月2日―4日

第36回山口県学校美術展　11月1日―4日

山口芸術短期大学卒業制作展　2月16日―19日

山口大学卒業制作展　2月23日―26日

美術館から

昭和五十八年度　新収蔵作品

伝周徳「山水図屏風」
紙本墨画淡彩六曲一双
作者不詳「山水人物図」（雪舟様）
（室町末期）紙本墨画淡彩軸
狩野芳崖「山水図」（江戸末期）
紙本墨画淡彩軸

伝周徳　山水図屏風　部分

雲谷等哲「花鳥図」（江戸前期）
絹本着色双幅
中野弘彦「芭蕉の雨」（一九七七）
紙本着色
桂ゆき「作品」（一九六〇）
油彩・カンヴァス
松田正平「周防灘」（一九八〇）
油彩・カンヴァス
三輪休和「萩壺」（一九五五）陶器
作者不詳「萩茶碗」（江戸中期）陶器
作者不詳「萩飛獅子置物」
（江戸中期）陶器
作者不詳「萩牡丹唐草文手洗」
（一八二四）陶器
川口政宏「作品Hシリーズ」
（一九七八）ステンレススチール
最上寿之「カミガミトモガミ」
（一九七九）木
ピーター・ヴォーカス「プレート」
（一九八一）陶器
中野四郎「裸女立像」（一九三二）木

萩牡丹唐草文手洗

植木茂「トルソ」（一九五八頃）木
「トルソ」（一九六三頃）木
「トルソ」（一九七〇頃）木

常設展示案内

当館の常設展示室では、館蔵品を中心にして、テーマを設定した展示をおこなっています。これからの予定はつぎのとおりです。

◉第一常設展示室（一階）

●絵画展示室（香月泰男）
シベリア・シリーズ
香月泰男の代表作「シベリア・シリーズ」を展示します。（五月二九日～）

●絵画展示室（小林和作）
小林和作の世界
小林和作は豊麗な色彩を駆使したすぐれた風景画家であると同時に、古美術品の収集家でもありました。今回は、彼の油彩・水彩画にあわせて、そのコレクションのなかから、江戸時代の文人画を展示します。（五月八日～）

●絵画展示室（資料展示）
中本達也の銅版画
戦後の洋画界で、個性的な作品を制作し続けた作家・中本達也の銅版画を展示します。（五月八日～）

●郷土工芸室
萩焼と赤間硯
三輪休和をはじめとする近・現代の萩焼と、堀尾卓司の赤間硯を展示します。（五月一五日～）

◉第二常設展示室（二階）
五月二九日～七月二九日は「雲谷等顔と桃山時代」展のため休室します。

編集後記
今年度の最終号をおとどけします。「プラハ国立美術館秘蔵名画展・Ⅲ」の紹介を中心に編集しました。また、年間の主な活動をふりかえる意味で、「美術館この一年」を掲載しました。六月一二日から「雲谷等顔と桃山時代」展が開催されます。等顔のほか、狩野永徳、長谷川等伯、海北友松など、桃山時代の画人の代表的な作品も展示します。

山口県立美術館ニュース
「天花」　第一九号
昭和五九年三月三一日発行
発行　山口県立美術館
〒753 山口市亀山三―一
☎〇八三九―三五―七七八八
印刷　瞬報社写真印刷株式会社